

兵庫津遺跡第52次発掘調査報告書



2011
神戸市教育委員会

序

港の発展が都市としての発展につながってきた神戸市。兵庫津遺跡は、港湾都市でもある神戸市の歴史となる遺跡です。港湾には、商業、運送業、製造業などさまざまな職種の人々や街が形成され、その賑わいと人々の商売繁盛を願う思いもことさら大きいものであったと思われます。今回の発掘調査は、商売繁盛を願う、人々が参拝に訪れる蛭子神社の本殿建替工事に伴う発掘調査です。

平成14年に同神社境内で実施した第29次調査において、「從是東尼崎領」の石標が出土しており、江戸時代に作製された絵図からも、港湾都市兵庫津への西の玄関口となる柳原惣門付近と考えられる地点での発掘調査となりました。

今回の調査では、町の出入り口の周辺に存在した公共空間、もしくは信仰の対象となった土地の変遷が伺え知れる資料が得られました。

最後に、発掘調査および本報告書を作成するにあたり、ご協力いただきました蛭子神社をはじめ関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市兵庫区西柳原町5番20号に所在する、兵庫津遺跡第52次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、神戸市教育委員会が宗教法人 蛭子神社から委託をうけて、実施したものである。
3. 現地での調査は、平成22年2月2日から平成22年3月5日まで実施し、神戸市教育委員会 阿部敬生・川上厚志が担当した。現地での調査終了後、神戸市西区に所在する神戸市埋蔵文化財センターにおいて出土遺物の整理、発掘調査報告書の作成を行った。調査対象面積は約160m²（延べ480m²）である。
4. 本書の執筆は、「第2章第5節」を丸山真史氏（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）より玉稿を賜った。「第2章第4節」は、文化財課学芸員中村大介の助言の下、阿部が執筆した。その他の部分の執筆と編集については阿部・川上が協議の上行った。遺物整理は、学芸員西岡誠司・阿部が行なった。
5. 現地での写真撮影は、阿部・川上が行い、遺物写真撮影は杉本和樹氏（西大寺フォト）が行った。
6. 本書に使用した方位・座標は世界測地系第V系座標、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で表示した。
7. 本書に記載した遺跡の位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「神戸首部」「神戸南部」の一部を使用し、調査地点の位置図は、神戸市建設局発行2,500分の1地形図「神戸駅」「兵庫」の一部を使用した。
8. 出土遺物の整理においては、全般において文化財課学芸員黒田恭正の教示を得た。
9. 発掘調査の実施ならびに本書の刊行に際しては、事業主である宗教法人 蛭子神社に多大なる協力をいただいた。

発掘調査組織

神戸市文化財保護審議会委員 史跡・考古資料担当（平成21・22年度）

工樂普通 大阪府立狭山池博物館長

和田晴吾 立命館大学教授

神戸市教育委員会事務局（平成21・22年度）

教育長	橋口秀志
社会教育部長	大寺直秀
参考（文化財課長事務取扱）	柏木一孝
主幹（埋蔵文化財センター所長事務取扱）	渡辺伸行
埋蔵文化財指導係長	丸山潔
埋蔵文化財調査係長	千種浩
文化財課主査	丹治康明・安田滋・斎木巖
事務担当学芸員	中谷正（平成21年度）・佐伯二郎（平成22年度）
調査担当学芸員	阿部敬生・川上厚志
遺物整理担当学芸員	黒田恭正・佐伯二郎（平成21年度） 西岡誠司（平成22年度）
保存科学担当学芸員	中村大介

目 次

序・例言

発掘調査組織・目次

第1章 はじめに	1
第1節 兵庫津遺跡の立地と環境	1
(1) 遺跡の立地	1
(2) 遺跡の歴史的環境	2
第2節 兵庫津遺跡の既往の調査	3
第3節 調査に至る経緯と経過	6
第2章 調査の概要	7
第1節 第1遺構面の遺構・遺物	7
第2節 第2遺構面の遺構・遺物	11
第3節 第3遺構面の遺構・遺物	18
第4節 金属製品	26
第5節 兵庫津遺跡第52次調査出土の動物遺存体	28
第3章 まとめ	31

第1章 はじめに

第1節 兵庫津遺跡の立地と環境

(1) 遺跡の立地

兵庫津遺跡は、古湊川によって形成された扇状地の末端から砂州の臨海部に立地する、奈良時代から近世に至る複合遺跡である。古湊川は明治34〔1901〕年に現在の新湊川に付け替えられるまで湊岬へと流れ込んでおり、六甲山系より多量の土砂を運んで形成された低湿地上に立地している。

現在は、JR神戸駅の南側から兵庫駅、和田岬駅にかけての一帯、南北2.0km、東西1.5kmほどの範囲であり、神戸市内最大の遺跡の範囲である。この範囲は、元禄9年〔1696年〕に作成された『揖州八部郡福原庄兵庫津絵図』（以下『元禄絵図』という）に描かれている町域とほぼ合致する。



fig.1 調査地を北上空より望む

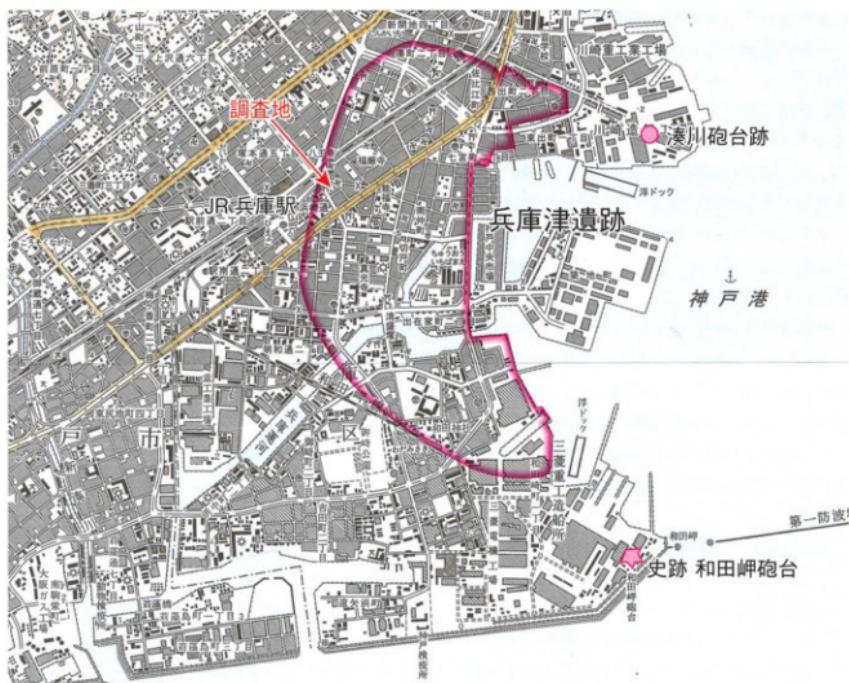


fig.2 兵庫津遺跡の範囲 (S=1 : 25,000)

(2) 遺跡の歴史的環境

奈良時代以降、「大輪田泊」として知られていたが、平安時代後期における平清盛による整備によって隆盛の基礎が築かれた。

中世においては兵庫（島）と呼ばれ、寺社勢力の庇護を受けて瀬戸内海海運の主要港として大いに栄えた。鎌倉時代になると、法然、一遍、觀音などが訪れ活動していたことが知られている。

鎌倉時代後期の延慶元〔1308〕年に伏見上皇による東大寺へ兵庫関の寄進が行われ、また暦応元〔1338〕年には興福寺が「兵庫島商船目錢」の徵収権を獲得したことにより、南北2つの関（北関・東大寺、南関・興福寺）が成立した。兵庫津の貿易港としての収益が寺社を大いに栄えさせていたことがわかる。

室町時代前期以降、明との通商窓口として整備され將軍足利義満の兵庫下向の記事が『教言卿記』などに記されている。応永27〔1420〕年には朝鮮使節来日の記事において兵庫津の町屋の立ち並ぶ様子について、「高低の板屋は蜂屯（はちのす）のごとし」の記述がみられる。『兵庫北関入船納帳』の内容からも当時の兵庫津の繁栄の様子を窺うことができる。

こうした繁栄については、応仁・文明の乱（応永元年〔1467〕～文明9年〔1477〕）以降衰退し、瀬戸内海貿易の主要港の立場を堺に譲るとの考え方が存在するが、これまでの発掘調査の成果からは衰退したことを否定するだけの資料が得られている。

天正8年〔1580〕、織田信長による花隈城攻めの際に兵庫津も攻撃される。その後、池田恒興（信輝）により現在の中央市場跡地周辺に兵庫城が築かれ、兵庫津の町を取り囲むように外輪堤（都賀堤）とその外側の堀割が築かれた。兵庫城築城の際には花隈城の石材が使用されたと伝わる。

慶長元年〔1596〕に京阪神地域を襲った「慶長伏見地震」については、「言經卿記」に「兵庫在所崩了、折節火事出来候、悉焼了、死人不知數了」の記載や須磨寺の『當山歷代』の記述から被害の大きさを知ることができる。その後、豊臣氏の直轄領から元和3年〔1617〕に尼崎領に編入となり、「兵庫陣屋」が設置され奉行が置かれる。その後、西国街道の宿場町として発展し、宝永5年〔1708〕に大火に見舞われるものの、宝永8年〔1711〕には人口2万人を数えるほどの都市として栄える。

明和6年〔1769〕には兵庫津は幕府直轄領となり（明和の上知）、「勤番所」が設置され、大坂谷町代官支配となっている。勤番所設置時に周囲の堀が埋め立てられており、兵庫陣屋期の範囲よりも狭められている。

慶応3年〔1867〕に兵庫（神戸）開港により、近代の幕開けとなる大きな転換点を迎える。

明治元年〔1868〕になると「兵庫鎮台」が設置され「兵庫裁判所」を経て初代「兵庫県庁」が置かれるが、その後、明治7〔1874〕年新川運河開削（翌年完成）が行われ、兵庫城築城以来兵庫津の中心地域であった海岸沿いの地域にが大きく変貌していくこととなる。

明治22年（1889）には山陽鉄道（現JR山陽本線）が開通し、周辺の道路形状も変更されたことにより、兵庫津の北部の地域の町並みにも大きな変化がおとずれる。

第2節 兵庫津遺跡の既往の調査

これまでに51次にわたる調査が実施され、江戸時代の町屋や墓地などの遺構が各調査において検出されており、次第に兵庫津遺跡の実態が判明しつつある。また遺物についても各時代の土器をはじめ、国内外各地域産の陶磁器、銭貨、鉄製品、貿易陶磁器などが質・量ともに豊富に出土している。

以下、これまでの調査次数と調査内容を表にまとめる。

表1 兵庫津遺跡調査一覧

調査 次数	調査 年度	所在地	調査主体	調査 面積	主な調査内容	文献等
1	1985	長岸区三川口町2丁目	神戸市教育委員会	300	先史時代～中世遺物包含層、中世の河道・溝地状遺構を検出。	(1)
2	1987	長岸区御橋本町1丁目	大手前女子大学	1,200	中世～近世の落ち込み状遺構、建物、土坑など検出。	(2)
3	1988	兵庫区水沢町2丁目	神戸市教育委員会	700	土坑、足踏状遺構、鞋状遺構	(3)
4	1990	長岸区西仲町1丁目	神戸市教育委員会	153	縄文時代～氷室町時代 土坑・溝、江戸時代 土坑・ピットを検出。	(4)
5	1991	長岸区西宮町2丁目	神戸市教育委員会	20	遺構未検出。中世の遺物出土。	(5)
6	1994	兵庫区西出町・西出町2丁目	兵庫県教育委員会	480	17～19世紀後半の水田・井戸・土坑・溝・建物・柱穴などを検出。	(6)
7	1994	兵庫区西神原6～7丁目	神戸市教育委員会	65	江戸時代の井戸・土坑・溝を検出。	(7)
8	1995	兵庫区中ノ島2丁目	神戸市教育委員会	111	近世遺物包含層を検出。明治時代までの本堂基礎を検出。	(8)
9	1996	兵庫区門口町5丁目	神戸市教育委員会	200	中世末～近世整地層を検出。	(9)
10	1996	兵庫区殿町屋町2丁目	神戸市教育委員会	50	近世の窓格子を検出。	(10)
11	1996	兵庫区七宮町2丁目～西宮内町	兵庫県教育委員会	582	中世～近世後半の土坑・溝・井戸・柱穴・道路状遺構・流路検出。	(11)
12	1996	兵庫区西出町2丁目	兵庫県教育委員会	738	江戸時代後期の井戸・柱頭・ピットを検出。	(12)
13	1997	兵庫区兵庫町1丁目～西宮内町	兵庫県教育委員会	3,600	13世紀後半～19世紀時代の井戸・土坑を検出。	(13)
14	1998	兵庫区七宮町2丁目	神戸市教育委員会	750	中世～近世にかけての8面の造構面を確認。中世の礎石建物や石板敷設、近世の瓦礫群などを検出。第2遺構面では宝永の大火に伴う焼上層を良好な状態で検出。	(14)
15	1998	兵庫区七宮町1丁目	兵庫県教育委員会	52	江戸時代～明治時代の薪木浜の石垣検出。	(15)
16	1998～9	兵庫区本町1丁目	神戸市教育委員会	60	7面の造構面を確認。中世末～近世にかけての瓦礫に伴う造構を検出。	(16)
17	1998～9	兵庫区本町1丁目	神戸市教育委員会	100	近世の土坑・ピット・礎石を検出。	(17)
18	1999	兵庫区三川町1丁目	神戸市立教育委員会	305	近世前半以前の水田・耕種検出。	(18)
19	1999	兵庫区本町2丁目	神戸市立教育委員会	60	江戸時代後期の建物・石垣を検出。	(19)
20	1999	兵庫区七宮町2丁目	神戸市立教育委員会	330	文政の大火に伴う焼土面を含む9面の造構面を確認。町屋群や町屋に伴う遺構を検出。	(20)
21	1999	兵庫区七宮町2丁目	神戸市立教育委員会	280	7面の造構面を確認。草木塀の脇間に残された仏堂の跡と考えられる遺構も検出。	(21)
22	1999	兵庫区・川口町2丁目	神戸市立教育委員会	200	14世紀前半 溝・溝・湿地状跡立ち込み。14世紀後半 溝・15世紀 水田時野・室町時代末 溝検出。	(22)
23	2000	兵庫区西神原8丁目	神戸市立教育委員会	266	近世後半～末の溝、ピット、落ち込みを検出。	(23)
24	2001	兵庫区七宮町2丁目	神戸市立教育委員会	250	中世末～江戸時代末の9面の造構面を確認。近世の町屋を検出。	(24)
25	2001	兵庫区兵庫町2丁目	神戸市立教育委員会	175	17世紀後半～19世紀の遺構面を9面確認。建物・井戸・溝などの造構を検出。	(25)
26	2001	兵庫区須佐野通1丁目	神戸市立教育委員会	745	中世及び近世の造構面を2面確認。「折州八部郡福原庄兵庫詳説図」(元禄9年 1696)記載の寺光寺の塔を検出。	(26)
27	2001	兵庫区三川口町1丁目	神戸市立教育委員会	14	17世紀後半の土坑、18世紀後半の土坑を検出。	(27)
28	2002	兵庫区須佐野通1丁目	神戸市立教育委員会	32	近世末頃の遺路状遺構を検出。	(28)
29	2002	兵庫区西柳原町	神戸市立教育委員会	75	荷原惣門の東側本柱と柱栓柱の礎石掘え跡検出。	(29)
30	2002	兵庫区東出町3丁目	神戸市立教育委員会	20	5面の造構面を確認。18世紀を中心とする町屋開闢遺構を検出。	(30)
31	2002	兵庫区大切口町	神戸市立教育委員会	187	3面の造構面を確認。室町時代の溝・土坑・ピット、近世後半の水路などを検出。	(31)
32	2003	兵庫区芦原通1丁目	神戸市立教育委員会	40	奈良時代～平安時代前にかけての溝・柱穴を検出。2条の溝について、港湾施設の可能性も考えられる。	(32)
33	2004	兵庫区神明町	神戸市立教育委員会	320	中世末～明治時代までの3面の造構面を確認。中世の集落上坑・溝、江戸時代中期の上坑・落ち込み・累・墓末～明治時代の礎石列・区溝・溝・遺構を検出。	(33)
34	2004	兵庫区本町1丁目	神戸市立教育委員会	50	室町時代～江戸時代までの3面の造構面を確認。町割が室町時代まで残ることを確認。	(34)
35	2004	兵庫区切戸町	神戸市立教育委員会	70	兵庫城開闢遺構の発見。兵庫陣屋及び櫛番所北西側の刷毛・石垣を検出。	(35)
36	2004～5	兵庫区北瀬原町1丁目	神戸市立教育委員会	800	3面の造構面を確認。中世末の溝・柱穴、江戸時代の建物基壇・石垣・土坑・溝・遺構・遺路状遺構などを検出。	(36)
37	2005	兵庫区松原通1丁目	神戸市立教育委員会	69	近世以降の整地層検出。下層については未調査。	(37)
38	2005	兵庫区切戸町1丁目	兵庫津遺跡3次調査会	271	17～19世紀の町屋遺構・道路遺構などを検出。	(38)
39	2005	兵庫区切戸町	神戸市立教育委員会	100	室町時代 石造石造、近世 井戸を検出。	(39)
40	2006	兵庫区水沢町3丁目	神戸市立教育委員会	42	江戸時代中期の井戸・江戸時代後期～幕末の石列遺構を検出。	(40)
41	2006	兵庫区西出町	神戸市立教育委員会	40	中世及び近世の遺物包含層を検出。	(41)
42	2006	兵庫区西仲町	神戸市立教育委員会	445	7面の造構面を確認。室町時代の土坑、17世紀～18世紀の町屋などを検出。	(42)
43	2006	兵庫区東出町3丁目	神戸市立教育委員会	45	近世の石道・落ち込み、近代以降の石畳を検出。	(43)
44	2006	兵庫区本町1丁目	神戸市立教育委員会	250	町屋開闢の江戸時代の造構面を5面確認。	(44)
45	2007	兵庫区大切口町	神戸市立教育委員会	490	3面の造構面を確認。中世後半の井戸・土坑、江戸時代の墓などを検出。	(45)
46	2007	兵庫区大切口町	神戸市立教育委員会	9	元世の石畳を検出。	(46)
47	2007	兵庫区北瀬原川町2丁目	神戸市立教育委員会	40	2面の造構面を確認。江戸時代の井戸・墓末～明治時代の石畠・溝を検出。	(47)

48	2008	兵庫区本町2丁目	神戸市教育委員会	50	18世紀後半の石組み検出。	(48)
49	2008	兵庫区本町2丁目	神戸市教育委員会	27	宝町時代～江戸時代の8面の遺構面を確認。	(49)
50	2009	兵庫区兵庫町2丁目	神戸市教育委員会	210	中層 ピット、柱穴、溝、落ち込み 江戸時代 阿屋建物・井戸・土塁、遺構辨別を検出。	(50)
51	2009	兵庫区西宮内町2丁目	神戸市教育委員会	500	難倉時代～江戸時代までの7面の遺構面を検出。	(51)
52	2009	兵庫区西柳原町	神戸市教育委員会	160	18世紀～幕末頃の3面の遺構面を確認。	本告

(1) 黒田恭正・山本雅と「三川口町遺跡」「昭和60年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1988 ※

(2) 藤本史子編『兵庫津遺跡一御崎本町地区発掘調査報告書』大手前大学史学研究所2006

(3) 月治旗明『兵庫津遺跡』昭和63年度 神戸市埋蔵文化財年報』1994

(4) 黒田恭正『兵庫津遺跡』平成2年度 神戸市埋蔵文化財年報』1993

(5) 文獻なし。

(6) 岡崎正雄・岡田章一・深江英憲編『兵庫津遺跡 I』兵庫県教育委員会2002

(7) 文獻なし。

(8) 文獻なし。

(9) 池田駿『兵庫津遺跡第6次調査』「平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1999 ※

(10) 富山直人『兵庫津遺跡第7次調査』「平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会1999 ※

(11) 岡田章一・菱田淳子・深江英憲編『兵庫津遺跡 II』兵庫県教育委員会2004

(12) 岡崎正雄・岡田章一・深江英憲編『兵庫津遺跡 III』兵庫県教育委員会2002

(13) 岡田章一・菱田淳子・深江英憲編『兵庫津遺跡 IV』兵庫県教育委員会2004

(14) 黒田恭正・佐伯二郎・内藤俊哉編『兵庫津遺跡発掘調査報告書 第14・20・21次調査』神戸市教育委員会2010 ※

(15) 岡田章一・菱田淳子・深江英憲編『兵庫津遺跡 V』兵庫県教育委員会2004

(16) 内藤俊哉『兵庫津遺跡第17次調査』「平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2002 ※

(17) 佐伯二郎『兵庫津遺跡第18次調査』「平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2002 ※

(18) 山田清江・服部寛『三川口遺跡』「平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2002 ※

(19) 富山直人『兵庫津遺跡第19次調査』「平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2002

(20) 黒田恭正・佐伯二郎・内藤俊哉編『兵庫津遺跡発掘調査報告書 第14・20・21次調査』神戸市教育委員会2010

(21) 黒田恭正・佐伯二郎・内藤俊哉編『兵庫津遺跡発掘調査報告書 第14・20・21次調査』神戸市教育委員会2010

(22) 富山直人『兵庫津遺跡第22次調査』「平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2002

(23) 文獻なし。

(24) 東喜代秀・中居きやか『兵庫津遺跡第24次調査』「平成13年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2004

(25) 東喜代秀『兵庫津遺跡第25次調査』「平成13年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2004

(26) 阿部敦生・阿部功『兵庫津遺跡第26次調査』「平成13年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2004

(27) 文獻なし。

(28) 文獻なし。

(29) 須藤宏『兵庫津遺跡第29次調査』「平成14年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2005

(30) 須藤宏『兵庫津遺跡第30次調査』「平成14年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2005

(31) 阿部功『兵庫津遺跡第31次調査』「平成14年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2005

(32) 佛崎浩幸『兵庫津遺跡第32次調査』「平成15年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2006

(33) 藤井太郎『兵庫津遺跡第33次調査』「平成16年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2007

(34) 須藤宏『兵庫津遺跡第34次調査』「平成16年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2007

(35) 内藤俊哉編『兵庫津遺跡 - 第35次発掘調査概要一』神戸市教育委員会2006

(36) 藤井太郎編『兵庫津遺跡第36次発掘調査概要報告書』神戸市教育委員会2006

(37) 文獻なし。

(38) 田中一康編『兵庫津38』「兵庫津遺跡38次調査会2006

(39) 阿部功『兵庫津遺跡第39次調査』「平成17年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2008

(40) 清谷誠介『兵庫津遺跡第40次調査』「平成18年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2009

(41) 藤崎浩幸『兵庫津遺跡第41次調査』「平成18年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2009

(42) 阿部功編『兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2008

(43) 清谷誠介『兵庫津遺跡第43次調査』「平成18年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2009

(44) 中谷正『兵庫津遺跡第44次調査』「平成18年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2009

(45) 佐伯二郎編『兵庫津遺跡第45次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2008

(46) 川上厚志『兵庫津遺跡第46次調査』「平成19年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2010

(47) 富山直人『兵庫津遺跡第47次調査』「平成19年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2010

(48) 清谷誠介『兵庫津遺跡第48次調査』「平成20年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2011

(49) 阿部功『兵庫津遺跡第49次調査』「平成20年度 神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会2011

(50) 井尻格編『兵庫津遺跡第50次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2010

(51) 石島三和編『兵庫津遺跡 - 第51次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2010

*神戸市教育委員会では、現在市内各遺跡の調査次数について見直し作業を実施中であり兵庫津遺跡においても過去の一部の調査について調査次数の訂正を行っている。このため過去『神戸市埋蔵文化財年報』において調査の概要を掲載した際と調査次数が異なるものがある。また、以前「三川口町遺跡」として別の遺跡としていたものについても調査成果を考慮して現在は「兵庫津遺跡」の中に含めている。

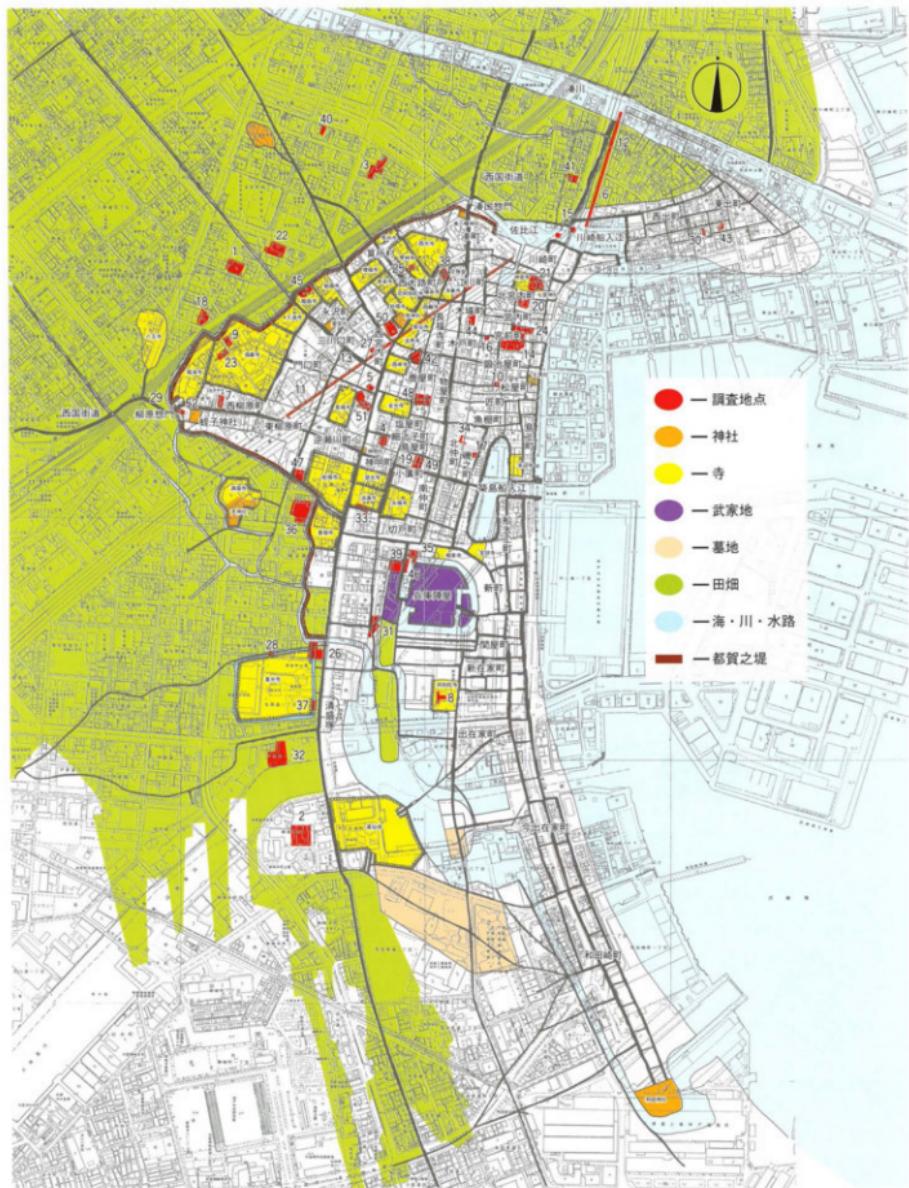


fig.3 元禄兵庫津復元図

(神戸市立博物館「よみがえる兵庫津」及び神戸市教育委員会「兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書」をもとに作成)

第3節 調査に至る経緯と経過

兵庫津遺跡の西端部に所在する蛭子神社の社殿建替が計画されたことにより工事対象範囲について発掘調査を実施した。現代において「柳原えびす」として広く親しまれている蛭子神社は、創建年代は不明であるものの、先の『元禄絵図』において「戎社」として記載があることから、遅くとも元禄には当地に鎮座していたことが判明している。

また、当調査地は江戸時代の西国街道の兵庫津の町の西側の入口である「柳原惣門」が所在した地点として考えられている。「柳原惣門」についてはその創建及び廃棄の時期についての記録は現時点では全く知られていない。しかしながら、創建については『福原鬱鏡』（延宝8〔1680〕年）に描かれているものが最も古い記載であり、これ以前に存在したことは確実である。天正8〔1580〕年の兵庫城築城に伴って築造されたと考えるのが現段階では妥当であろう。また廃絶については、『兵庫津細見全図』（明治2〔1869〕年）には描かれているが、『兵庫神戸実測図』（明治14〔1881〕年）に湊口惣門の記入があるが、柳原惣門については記載がないため、これまでに廃絶されたことが想定される。おそらくは、明治8〔1875〕年に都賀堤とともに撤去されたものと考えられる。

平成14年度に今回の調査区の西隣にあたる場所において第29次調査を実施した結果、惣門の主柱及び脇柱と考えられる柱穴を検出した。また、「徒是東尼崎領」と刻まれた石製の標柱が後世の土層からではあるが出土しており、兵庫津が尼崎領であった元和3〔1617〕年から明和6〔1769〕年までの間に柳原惣門よりも外側の地に設置された標柱と考えられる。

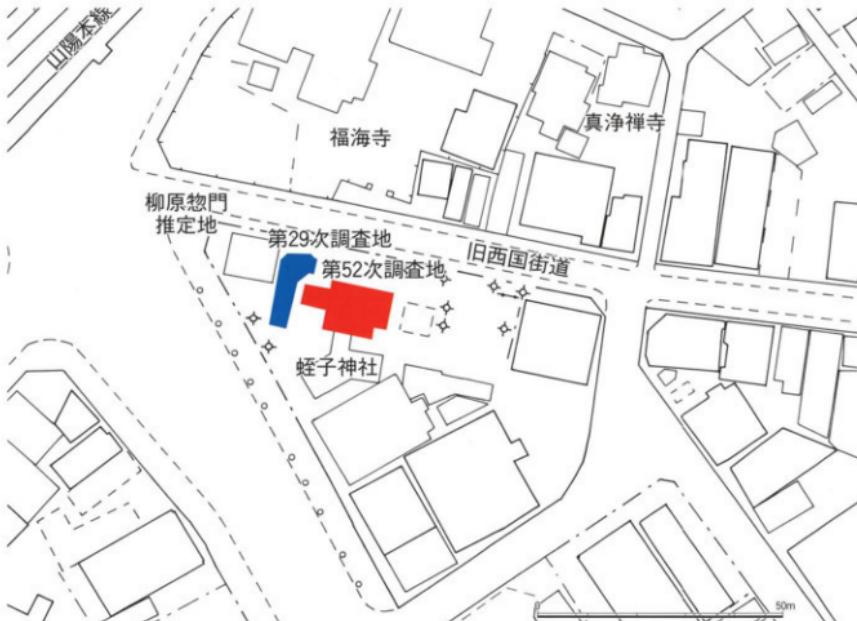


fig.4 調査地位置図

第2章 調査の概要

第1節 第1遺構面の遺構・遺物

今回の調査では、3面の遺構面を確認したほか、第1遺構面よりも上位において、明治期以降のものと考えられる便所遺構・水琴窟なども検出している。

第1遺構面では、胞衣壺埋納遺構、土坑、ピット、建物跡、竈状遺構などの遺構を検出した。

遺構面検出中に文久永宝1枚（文久3〔1863〕年初鑄）が出土していることなどから、幕末期頃の遺構面と考えられる。



fig.5 第1遺構面平面図

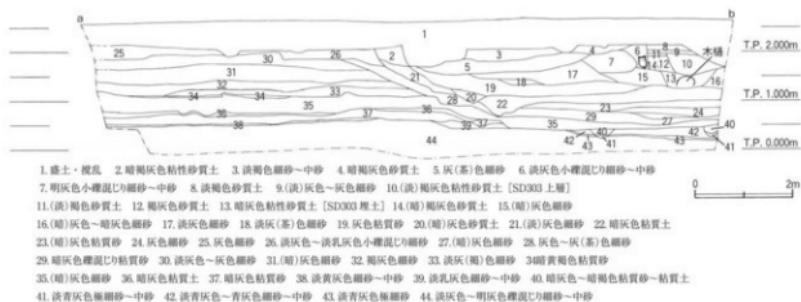


fig.6 調査区北壁断面図

土間（SB101）

調査区東端部で土間を検出した。南北5.5m程度を測るが、北側及び東側は調査区外に延びるため本来の建物の規模は不明である。土間上面には焼土が広がる部分が数ヶ所認められた。

土間の西側の調査区北壁際で、胞衣壺が1個体出土している（SX103）。ピット状の埋納坑に伴うもので、蓋を伴う完形品である。



fig.7 第1遺構面全景（東から）

礎敷き（SB102）

調査区中央西より建物に伴うものと考えられる礎敷きを検出した。町屋の床下部分にあたるものと考えられるが、攪乱等の影響もあり、本来の規模は不明である。

竈状遺構（SK106～SK108）

調査区西端部で3基の竈状遺構を検出した。

径0.8～1.1m程度の同規模の土坑状の遺構で、近接して存在する。壁面が焼けており、埋土中に焼土を含む。SK107はSK108を切っておりSK108より新しいものと考えられるが、SK108からは磁器・瓦が出土しているがSK107からは遺物が出土しておらず、時期差について明確にできない。SK106からは陶器、磁器が出土している。

第1遺構面検出中に出土した遺物について

第1遺構面検出中には、土師器、陶器、磁器、瓦、土製品、銅製品が出土している。

陶器には在地系、磁器には肥前系を含んでいる。土製品には土錘・器物形土製品があり、器物形の中には丁銀・狛犬・建物？がある。

銅製品には、錢貨、簪、銅金具、把手金具、銅環がある。

錢貨には、文久永寶1枚、寛永通寶8枚（古寛永通寶4枚、新寛永通寶4枚）がある。

丁銀形土製品（fig.10・表紙写真）

一方の端を欠き、後述するように文様の退化も著しいため上下の識別も困難であるが、今回は残存部分の文様の筆致などからfig.10のように図化した。残存する法量は、長さ4.65cm、幅2.4cm、厚さ1.05cm、重さ13.75gを測る。

丁銀形土製品は、当遺跡の中ではこれまでに第14次調査で1点、第20次調査で2点の出土が報告されている。両調査出土例と比較すると、本調査例はかなり退化が進んでおり、上下の「文」の文字の喪失や「大黒天」「恵比寿」の退化など通有の丁銀形土製品に比べて簡略化が著しい。



fig.8 第1遺構面全景（西から）



fig.9 第1遺構面検出中出土遺物〔土師器・陶器・磁器〕

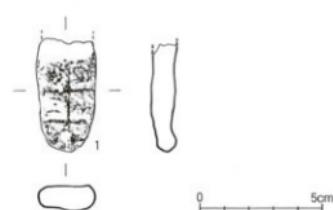


fig.10 丁銀形土製品実測図



fig.11 SK102胎衣壺出土状況（西から）



fig.12 SX103胎衣壺出土状況（南から）

胎衣壺埋納遺構（SK102・SX103）

2基の胎衣壺埋納遺構を検出した。

SK102は、調査区中央やや東よりで検出した。長径0.88m、短径0.61m、深さ6cmを測る土坑状の遺構で、土坑の中心よりも北へ寄った場所に胎衣壺を設置している。胎衣壺は完存しているが、蓋は遺存していない。木製の蓋であった可能性も考えられる。

胎衣壺には土師器の短頸壺を使用している。内部から鉄釘、鉛滓が出土しているが、埋納時に入れられたものかどうかは不明である。蓋が遺存していないため、後世の混入の可能性が考えられる。

SX103は、調査区東部北壁で検出した。平面形は不明であるが、深さは50cmを測る。先述の土間(SB101)に伴うものである。

身は蛸壺を転用したもので、蓋は陶器の蓋を使用している。

SP102

調査区東端部で検出したピットで、0.44m×0.35mの規模をもつ、平面形が方形を呈するものである。

周囲を黄褐色粘土によって塗り固めており、内部に暗黒褐色粘性砂質土を充填している。防水等の意図が推察される。土師器・磁器の小片が出土している。



fig.13 SK102・SX103出土遺物【胎衣壺】



fig.14 SP102（西から）

SP104

後述するSX102の南側に隣接するかたちで検出した径27cm、深さ7cmを測るピットである。SX102に伴う可能性も考えられるが、詳細は不明である。陶器の徳利が1点出土している。ピット内から口縁部、周辺から体部以下が出土している。

SX101・SX205

調査区東端部で一連の遺構と考えられる落ち込みを検出した。径20~30cm大の礫とともに土師器、瓦質土器、丹波焼甕、陶器擂鉢、肥前系磁器、瓦などが出土地してい。



fig.16 SX101出土遺物〔陶器・磁器〕



fig.17 SX102（北から）

SX102

調査区北西部で検出した遺構で長径1m、短径0.5m程度の規模をもつ。棟瓦1枚、平瓦3枚（うち1枚は約半分）を長軸方向に並べ、周囲を黄白色の粘土で塗り固めている。



fig.15 SP104出土遺物〔徳利〕



fig.18 SX102出土遺物〔磁器・瓦〕

瓦及び黄白色粘土はともに2次焼成を受けた痕跡が認められる。遺構の性格は不明である。瓦よりも上位で土師器、磁器、土玉が出土している。

第2節 第2遺構面の遺構・遺物

第2遺構面では井戸3基、溝2条、土坑3基、ピット15基、性格不明遺構8基を検出している。出土した遺物から18世紀後半から19世紀半ば頃と推定できる遺構面である。

検出した遺構の中では、井戸が調査区の西半部

に偏る傾向がみられ、調査区東半部には、大型の石材を用いた遺構が集中する傾向が認められた。

遺構検出面の標高は、東端部ではT.P.約2.0m、西端部でT.P.約1.8mを測る。

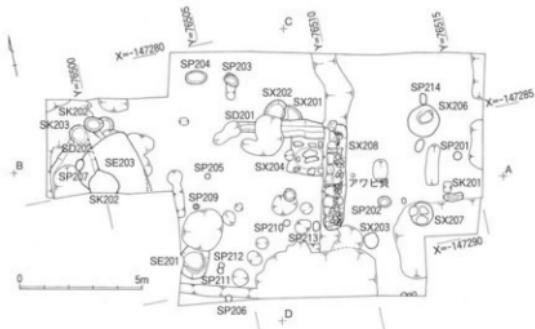


fig.19 第2遺構面平面図



fig.20 第2遺構面全景（東から）



fig.21 第2遺構面全景（西から）

SD202

調査区西端部で検出した、最大幅1.8m、深さ17cmを測る溝で、長さ約1m分を検出した。

土師器、陶器、肥前系磁器碗（広東碗など）や碗蓋、貝等が出土している。

磁器碗蓋には焼継ぎ痕跡が認められる。当遺跡では、第33・36次調査でも報告例がある。焼継ぎは、寛政年間（1789～1800年）以降に流行したことが文献にも登場し、各地で出土例が報告されている。



fig.22 SD202出土遺物 [磁器]

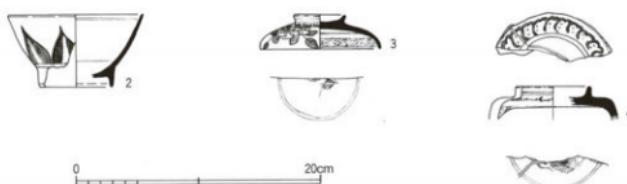


fig.23 SD202出土遺物実測図 [2~4: 磁器]

SE201

調査区南西隅で検出した井戸状の遺構である。北側を近代以降の井戸によって失われておらず、また西側は調査区外に延びている。北西部以外は2段掘りとなっている。検出した規模は、長径1.35m、短径1.15m、深さ60cmを測る。

施釉土師器灯明皿・有脚受付皿、土師器炮烙、陶器、肥前系磁器、瓦、鉄釘、銭貨（新寛永通寶1枚、銭種不明2枚〔うち1枚は鐵錢〕）などが出土している。



fig.24 SE201 (北東から)

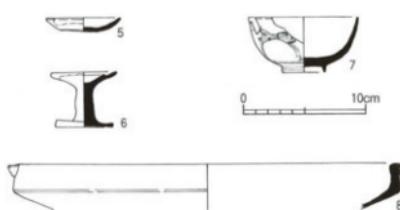


fig.25 SE201出土遺物実測図 [5~8: 土師器] 7: 磁器



fig.26 SE201出土遺物 [土師器・磁器・瓦]

SE202

調査区西端部で検出した井戸で、上部はSK106・107によって削平されており、南側は調査区外に延びる。検出した規模は、径1.2mで、平面形は円形を呈するものと考えられる。深さは1.5mを測る。底部から1m程度埋まった段階で、石製品などを投棄している。

後述するSE203と切り合い関係にあり、SE202の方が新しく築かれている。形状などから、両者が同一の井戸で、SE202は井戸枠設置部分、SE203はその掘形である可能性も考えられる。ただし、SE202はその断面観察からも明らかなように、壁面の立ち上がりが垂直に近い。もし井戸枠を抜き取ったのであれば、材質にもよるが何か井戸枠の痕跡が遺存してもよいのではないかとも考えられ、また井戸枠の抜き取りの際には壁面がもう少し崩落する可能性が高いものと考えられるが、そのような状況は認められなかった。

以上の状況から、本報告では両者を別の遺構として記述を行う。

施釉土師器灯明皿・有脚受付皿、在地系陶器行平鍋・同蓋、堺・明石産擂鉢、陶器蓋、肥前系磁器碗、瓦、鉄製品、貝などが出土している。



fig.27 SE202遺物出土状況（西から）



fig.28 SE202（北から）

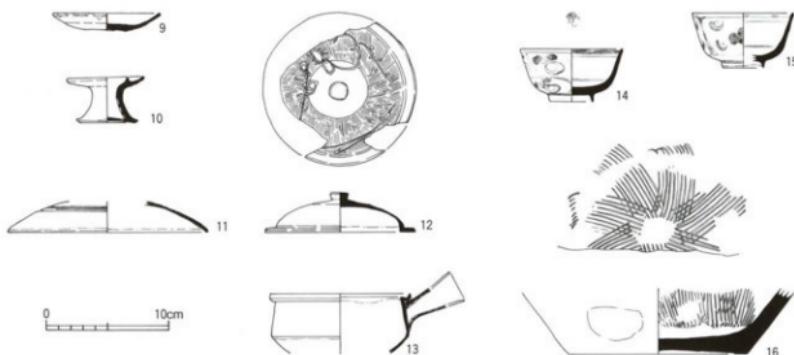


fig.29 SE202出土遺物実測図 [9・10：土師器 11～13・16：陶器 14・15：磁器]

SE203

調査区西端部で検出した井戸で、SE202によつて切られている。また、南側は調査区外に延びる。

検出した規模は、長径2.8m、短径2.4mで、深さは1.4mを測る。

SX201・SX202

調査区中央やや西よりで検出した遺構で、2基の土坑状の遺構が切り合うかたちの形状を示している。このうち東側のSX201は下部が溝状の形態を示す。

肥前系磁器碗、軒桟瓦、鉄釘、銭貨（銭種不明）などが出土している。



fig.30 SE203 (北西から)

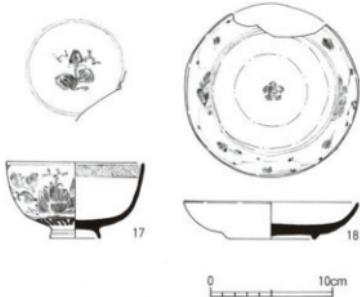


fig.31 SX201出土遺物 [17・18: 磁器]



fig.32 SX201出土遺物 [磁器・瓦]

SX203

調査区南東部で検出した、瓦集積遺構である。掘形は径62×67cmの土坑状を呈し、丸瓦・平瓦・棟瓦を縦方向（瓦の長軸方向）に立てて埋めている。深さは20cmを測る。

何らかの基礎や排水等の機能を有していた可能性が考えられるが、1基のみの検出であり、詳細は不明である。

瓦以外の出土遺物では、鉄釘が数点出土している。



fig.33 SX203 (北西から)

SX204

調査区中央で検出した、平面形が方形を呈する遺構である。他の遺構や攪乱によって本来の規模は不明であるが、現存する規模は、南北1.6m、東西1.5mを測る。

遺構の中央に、長径1.14m、短径0.9mの平面形が楕円形を呈する範囲で砂層の埋土があり、その中央に幅20~30cm、長さ60cm程度の扁平で細長い石を2石設置している。この2石の下部にも扁平な石を数段にわたって積み上げているが、周囲及び底部付近には大型の石は存在しない。

前述の楕円形プランの外側には扁平な径17~40cm程度の石を6石、等間隔に配置している。

中央に扁平な石2石を密着して設置しており、その密着する部分はやや窪んでいるように見えることから、上部に柱などを設置するための施設のような性格も想定することができる。

土師器皿、瓦質土器茶釜、陶器擂鉢、肥前系磁器碗、瓦、炉壁などが出土している。

磁器の中には、焼継ぎ痕のみられるものがある(fig.36・38)。同様の資料は、先述とおりSD202においてもみられ、当調査においては2例の出土例を確認したこととなる。この焼継ぎ痕のみられる資料から、SX204については、18世紀末~19世紀にかけての時期が想定できる。この想定される時期についてはfig.38に示したように他の出土遺物においても矛盾しないものと考えられる。



fig.34 SX204（南西から）
(すぐ東側にSX208、さらに北東側にSX206所在)



fig.35 SX204（西から）



fig.36 SX204出土遺物(1) [磁器]



fig.37 SX204出土遺物(2) [瓦]

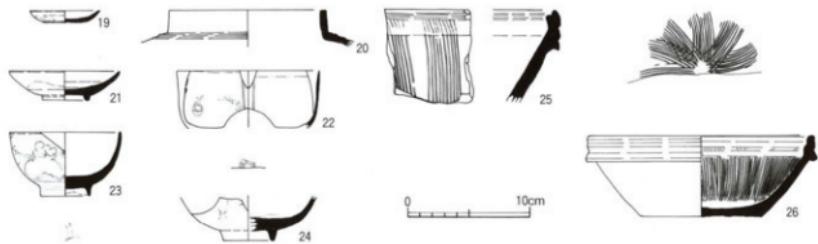


fig.38 SX204出土遺物実測図 [19: 土器器 20: 瓦質土器 21・25・26: 陶器 22~24: 磁器]

SX206・SX207

調査区東部で検出した2基の柱穴状の遺構である。2基の距離は3.9mを測る。現状での規模は、SX206が径1.3m、SX207は径1.0mを測るが、SX207は上部を搅乱によって削平されており、本来はSX206と同規模であったと考えられる。

SX207は根石しか遺存していないが、径40～50cmの扁平な花崗岩の自然石を3石組み合わせて、中心にあたる部分を窪ませており、上部に柱状のものを据えていたことが推察される。SX206は、SX207と同様に根石に花崗岩の自然石を3石用い、その上位に径54cm、厚さ18cmの扁平な花崗岩の切石を載せ、さらにその外側を黄褐色の粘質土によって固定している。石がずれないように配慮したものと考えられる。

以上のように2基の遺構は、大型の石材を数個使用し、また石を固定していることから判断すると、重量のある柱状のものを上部に据えていた可能性が考えられる。



fig.39 SX206 (南から)



fig.40 SX207 (南から)



fig.41 SX206・SX208出土遺物 [土器器・陶器・磁器]

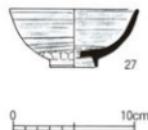


fig.42 SX206出土遺物実測図 [27: 陶器]

SX208

SX204の東側で検出した石垣状の遺構である。径40cm程度の面取り加工を施した花崗岩の石材を用いて西側に面をもつように設置している。検出した長さは、約4.3mを測る。

遺存しているのは1段分のみであるが、裏込めの石材（花崗岩）も検出しており、本来は上位にさらに数段石が積まれていたことが確実であるが、上部は搅乱によって削平されている。

SX204と近接する位置に所在しており、一連の遺構であった可能性も考えられる。



fig.44 SX208 (北西から)

また、SX208の東側でアワビ貝が1個出土している。長径15.2cm、短径12.7cm、高さ（貝の膨らみ）4.0cmを測る大型のものである。内側を上に向けて出土しており、意図的に据えたものと考えられる。貝の内部には何も遺存していなかった。アワビ貝は古代から神饌や贊に使用される重要な（神聖な）貝類である。本出土例も地鎮や祭祀などに使用された可能性も考えられる。

SX204・206・207・208と有機的な関連をもつ可能性を現状では考えているが、一方で第1遺構面に伴うものである可能性も否定することはできない。いずれの場合も祭祀的な意味合いで埋められた（据えられた）ものである可能性が高いが、掘形については検出できていない。今後類例の増加を待って検討する必要がある。



0 10cm

fig.43 SX208出土遺物実測図
[28・29：土師器 30：陶器 31：磁器]



fig.45 アワビ貝出土状況 (南東から)



fig.46 出土アワビ貝

第3節 第3遺構面の遺構・遺物

第3遺構面では、落ち込み、溝、井戸・土坑を検出した。18世紀前半頃の遺構面と考えられる。

溝のうち、SD301はSG301内に堆積した土層の最上層にあたり、SD303は、SG301に注ぎ込む形態をとっている両者は有機的な関係をもって同時併存していたものと考えられる。

遺構検出面の標高は、北東隅ではT.P.1.85m、西端部でT.P.1.5mを測る。

SG301

調査区南半部は大きく落ち込む地形となっていることを確認した。この落ち込みをSG301と呼称する。肩部は、東側及び西側は湾曲し、南側に曲がっている。南側の肩部は調査区内で検出できなかったため、地形が一段下がるだけなのか、堀や池などの完結する遺構の一部となるのかは不明である。

『元禄絵図』には「札場」の南側に湾曲するようなラインが認められ、このラインより南側には畠地が広がっていたことが示されている。今回検出したSG301の肩部が表すラインと同様な形状とも考えられ、両者の関連を考慮する必要がある。

土師器皿・鍋・炮烙・焼塩壺、瓦質土器火鉢、施釉陶器塊・壺、肥前系磁器碗・大皿・瓦、飴滓などが出土している。

焼塩壺（fig.49・51）は完存していないため刻印の有無は不明であるが、墨書の痕跡が残る。判読できていないためfig.49では図示していない。焼塩壺の墨書については小川望氏による江戸遣跡における考察があり、「日付」「数値」「人名」「地名」「權威」「塩」「刻印」「その他」等大きく8種類があり、他に判読不明のものがあるという。

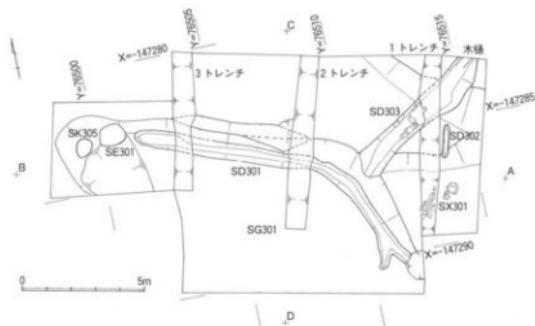


fig.47 第3遺構面平面図



fig.48 第3遺構面平面図全景（西から）

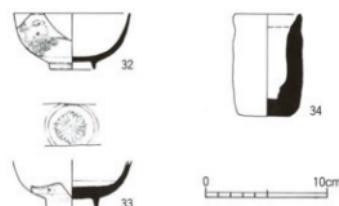


fig.49 SG301出土遺物実測図 [32・33：磁器 34：焼塩壺]



fig.50 SG301出土遺物(1) [土師器・瓦]



fig.51 SG301出土遺物(2) [焼塩壺]

SD301

先述のSG301内部の肩部付近に最上層が溝状に堆積しており、この部分をSD301として遺物の取り上げを行った。幅0.5~0.7m、最深部の深さは35cm程度である。

土師器皿・炮烙、陶器（唐津具器手塊、刷毛唐津壇、銅緑釉皿、丹波火入れ・擂鉢）、肥前系磁器皿・油壺、瓦、錢貨（新寛永通寶1枚）、土製品（器物形-仏）などが出土している。

また、SD301検出中にも多量の遺物が出土しており、錢貨の景德元寶1枚、古寛永通寶1枚、新寛永通寶1枚が出土している。

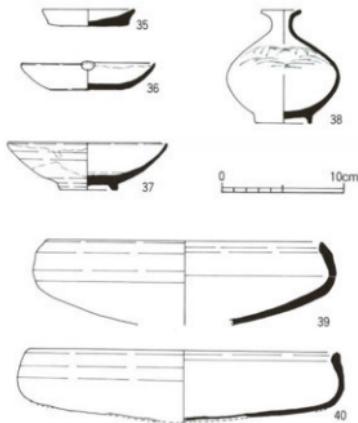


fig.53 SD301出土遺物実測図
[35・36・39・40:土師器 37:陶器 38:磁器]



fig.52 SD301全景 (南東から)



fig.54 SD301・SD301検出中出土遺物(1) [土師器]



fig.55 SD301・SD301検出中出土遺物(2) [陶器・磁器]



fig.56 SD301・SD301検出中出土遺物(3) [瓦・瓦質土器]
(2列目左、軒平瓦は第3遺構面検出中出土=fig.70中央)

SD303

調査区北東部でSG301に注ぎ込むようなかたちで検出した溝である。溝の底部及び立ち上がり部に一石五輪塔等の石造物の石材を使用して護岸としている。一石五輪塔のうちの1点については、「寛永六年」[1629]の年号や戒名と思われる文字が刻まれている。墓標として製作・使用されていたものが転用されたものと考えられる。これらの石造物の転用による護岸は溝の中央部付近のみ遺存していた。他の部分において石材の抜き取り痕などは検出されなかったことから、他の部分では石材による護岸は施されていなかったと考えられる。

また北端部で木樋の一部を検出した。検出した規模は、幅36cm、長さ1.44mであった。遺存状態があまり良好ではなく取り上げ不能であった。



fig.57 SD303 (東から)



fig.58 SD303 (北東から)



fig.59 SD303出土遺物(1) [陶器・磁器]

溝の護岸として転用されていた石造物は計7個体で、内訳は、一石五輪塔5点、宝篋印塔1点、五輪塔台座部分と思われる石材1点である。

一石五輪塔のうちの1点（fig.60後列中央）は砂岩製で、空・風輪と火・水・地輪の2点に別れて出土したが完形に復元できるものある。全体の規模は高さ76cm、重さ32.3kg、みかけの比重2.53kg/m³を測る。他の石造物は全て花崗岩製である。

砂岩製の一石五輪塔には発心門に空輪から地輪に各々「空」～「地」の漢字を刻み、さらに地輪には3行書きで右から「寛永六年 等林直妙禪定尼 八月八日」と判読される銘が認められる。

花崗岩製の一石五輪塔には、宝珠先端がわずかに欠けるがほぼ完存のもの（fig.60後列左）や、空・風輪を欠くもの（fig.60後列右）、地輪のみ残存するものがある。

地輪のみ残存するもののうち1体（fig.60中央）は、形状から一石五輪塔の地輪部と考えているが、別の石造物の可能性も考えられるものである。この1体については、4側面のうち隣り合う2面に梵字を刻んでいる。梵字のうち1字は「ア」と判読されるが他の1字は「ア」の可能性もあるが、判読不明である。残りの2面には上端で7×10cmを測る、深さ3cmの臍穴状の穿孔がある。この穿孔が当初より存在したものか転用時（SD303構築以前）に施されたものかは不明であるが、穿孔以前にこの2側面に梵字が刻まれていた痕跡は現状では認められない。穿孔部分に別の石材を挿入して使用した可能性も考えられるが、その場合一石五輪塔としての用途が認められるのかが問題となろう。今後の類例を待ってさらに検討する必要がある。

宝篋印塔は、相輪部のうちの請花・伏鉢が遺存している。

そのほか、SD303からは土師器、陶器、磁器、瓦、鉄製品などが出土している。土師器には皿・鍋・炮烙、陶器には唐津呉器手塊・刷毛唐津塊・三島手鉢、磁器には肥前系磁器碗・皿がある。

また鉄製品には、鉄釘・船釘がある。



fig.60 SD303出土遺物(2) [石造物]

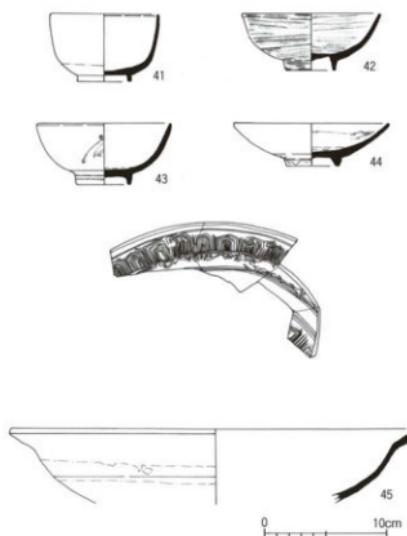


fig.61 SD303出土遺物実測図

[41・42・45：陶器 43・44：磁器]



fig.62 SD303出土一石五輪塔銘文写真



fig.63 同左拓影

SE301

調査区西端部で検出した井戸状の遺構で、長径1.12m、短径0.9m、深さ44cmを測る。

土師器、陶器、肥前系磁器小壺、瓦などが出土している。

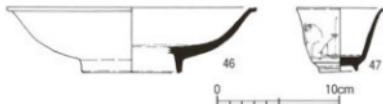


fig.64 SE301出土遺物実測図 [46: 陶器 47: 磁器]

SK305

調査区西端部、SE301の西側で検出した土坑で、長径0.8m、短径0.6m、深さ28cmを測る。

土師器、陶器、肥前系磁器碗・蓋、瓦などが出土している。

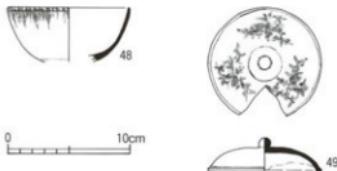


fig.66 SK305出土遺物実測図 [48・49: 磁器]



fig.65 SE301・SE301検出中出土遺物〔土師器・陶器・磁器・瓦〕



fig.67 SK305出土遺物〔磁器〕

第3遺構面検出中に出土した遺物

第2遺構面基盤層以下第3遺構面検出に至るまでの土層中からは、土師器皿、陶器（唐津呂器手塊、刷毛唐津塊、三島手鉢、肥前系京焼風陶器塊、備前擂鉢・壺・甕・丹波擂鉢、須佐唐津擂鉢）、中国青磁、肥前系磁器碗、瓦、土製品、鐵製品、銅製品、硯などが多く出土している。

瓦には、中世から近世にかけてのものが含まれていると思われるが、通有の軒瓦などのほか用途不明の道具瓦など多種の瓦が含まれている。

土製品には、土錘・土人形・器物形があり、土人形には、恵比寿・仏・猿があり、器物形には、宝袋・宝船・燈籠・碗・擂鉢がある。



fig.68 第3遺構面検出中出土遺物〔磁器〕

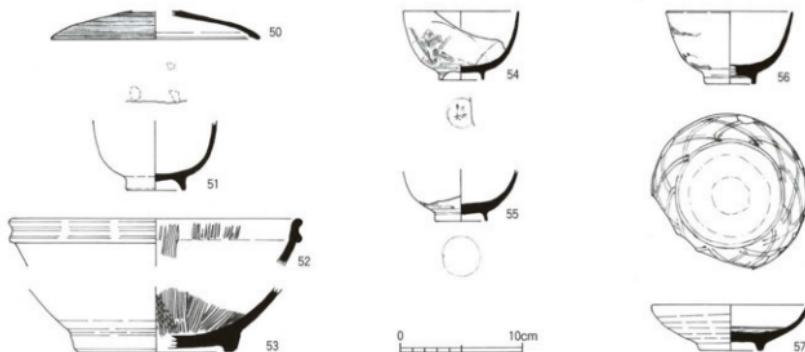


fig.69 第3遺構面検出中出土遺物実測図 [50~53: 陶器 54~57: 磁器]

また瓦の中に注目すべき資料が数点認められる。1点は、軒平瓦凸面にヘラ状工具により草花?の線刻が残るものである（fig.70中央）。欠損があり全体像は不明であるが、瓦を葺いた場合には隠れる部分に装飾を施していることになり、その意図は不明である。

他に、ヘラ工具による記号が残るものがある。fig.70左は先述のSG301から出土した丸瓦で、凸面端部付近に「×」状の記号が残る。また第3遺構面検出中に出土したfig.70右の瓦にもやや弧を描くような線刻が残る。記号といえるものかどうかの判断は難しいが、ここであわせて報告する。



fig.70 ヘラ書き文様・ヘラ記号をもつ瓦
（左：SG301出土 中央・右：第3遺構面検出中出土）

第3遺構面より下層
SX301

調査区南東部で集石を検出した。検出した層位は前述のSG301の肩部を形成する土層にあたり第3遺構面よりも下位に相当する。石材の中には緑石状の直方体の石材や加工がみられるものがあり転用品と考えられる。土留めなどの目的で投入・設置されたものである可能性が考えられる。

第3遺構面より下層の状況についてさらに把握するために断削調査を実施した。調査区北壁際で行った断削調査では、T.P. 0 m付近以下には砂層 (fig.6-44層) が堆積しており、この砂層には遺物を含まず、遺構も確認されなかった。

第3遺構面より下層（上記44層より上位）からは中世から近世にかけての遺物が出土しており、遺構には伴わないが特徴的な遺物が含まれる。

fig.73は文字瓦である。前述のSX301の周辺から出土した。文字は、SD303出土一石五輪塔地輪部に刻まれた「地」字や中世の文書（元弘3年但馬伊達文書）にみられる「地」字とほぼ同一であることから、「地」と考えられる。

軒丸瓦の凸部頂上部に銭貨の押印が認められるものがある (fig.74)。銭貨は崇寧重寶と考えられ、2ヶ所押印している。押印された崇寧重寶は外縁が残るものであるが、同銭貨は当十銭の大錢で近畿地方の出土例では外縁が削られる場合が多い。銭貨自体の出土ではないが貴重な資料である。



fig.71 SX301 (南東から)



fig.72 第3遺構面より下層出土遺物 [土師器・瓦質土器・陶器・磁器]



fig.73 文字瓦



fig.74 銭貨押印瓦



fig.75 同左拓影 (部分) (S=1:1)



fig.76 同左反転データ (S=1:1)

文字瓦 圖版	小・多(彌(ひ)) 集瓦(集(しゆ))	周文 巴文	大・少(彌(ひ)) 尤(餘(よ))	巴片彌(彌(ひ)) 其文(きぶん)	鳥余瓦 鬼板	菊花瓦 花文瓦	新平瓦 出(じゆ)	陶瓦 軒伏瓦
文字瓦 圖版 92 91								
SG301								
SD301 SE301								
第3造機面 下層								
SD301 檢出中								
第3造機面 檢出中								
SX101								

fig.77 出土軒瓦等造機面別変遷図 (S=1 : 8) (※ 1 : 1 畫) 文字瓦 (fig.73) ※ 2 : 舊片彌印瓦 (fig.74) ※ 3 : 凸面へラ描き文解平瓦 (fig.70中央)

鉄製品は、64点出土しており、このうち21点について表3にまとめている。未掲載の鉄製品の大半は鉄釘である。

内訳は船釘、鉄釘、鉄鎌、包丁、刀子、火打金、鉄錠、鐵鑿で、環状鉄釘1点を除き、第2遺構面以下の土層から出土している。

鉄製品の中では鉄釘が最も多く出土しており、表3に示したうちの9点が第2遺構面において検出した遺構より出土している。

鉄鎌1枚については腐食のため銘種不明である。

今回の調査で出土した鉄製品のうちの大半は当遺跡における町屋部分での調査において通常みられるもので、この点については当調査出土資料も資料の追加を行うことができたと評価できる。

また船釘や鉄鑿の存在は、港町兵庫津らしく船大工の存在を想定させる資料と考えられる。

以上の銅製品・鉄製品のほかに輪羽口1点、炉壁11点、鉱滓12点が出土している。今回の調査では鍛冶関連の遺構は検出されなかったが、これらが出土したことは近隣の地区において鍛冶が行われていたことも考慮に入れる必要があることを示している。炉壁合計1,720g、鉱滓合計2,259.5gが出土している。

表3 出土鉄製品一覧

番号	遺物名	出土地区	出土層位	法面(mm)			備考
				長さ(目)	幅	厚さ	
105	船釘	北東隅	SDD003	100.4	23.2	3.5	斜の幅・頭幅
106	船釘	西半部	SZB01	69.2~	12.8	5.9	
107	船釘	北東隅	SDD003	54.3~	45.4	6.0	
108	鉄釘	南西隅	SZB01南北	35.1	8.8	3.1	
109	鉄釘	南西隅	SZB01南北	28.0~	9.4	4.0	
110	鉄釘	東半部	SDD003See	20.5~	15.8	5.1	
111	鉄釘	南西隅	SZB01	24.6~	6.0	2.8	
112	鉄釘	中央部	SZB02横曲中	96.9	7.7	3.9	
113	鉄釘	南西隅	SZB01	37.7~	—	4.4	
114	鉄釘	南東隅	SZB01南北	45.2	8.1	3.7	
115	鉄釘	南西隅	SZB01南北	39.5~	—	3.1	
116	鉄釘	南西隅	SZB01	23.8~	4.1	3.4	
117	鉄釘	南東隅	SZB03	18.6	4.0	2.8	
118	環付鉄釘	南西部	SK104	80.9	11.4	8.0	環欠損
119	鉄鎌	東半部	第3遺構面発出中	162.7~	43.2	4.1	
120	包丁	北東隅	SDD003横曲中	102.3~	34.5	2.6	
121	鉄刀子	西半部	SP210	53.6~	10.7	4.0	
122	鉄製品	西端部	SZB02	41.7	13.4~	5.0	
123	火打金	西端部	SZB01横曲中	71.1	37.4	6.0	カスガイ型・本質
124	鉄鉗	南西隅	SZB01	26.4	—	1.5	頭尖不明
125	鉄鑿	南西隅	第3遺構面発出中	261.6~	26.9	10.0	輪はタガの徑



fig.80 出土鉄製品

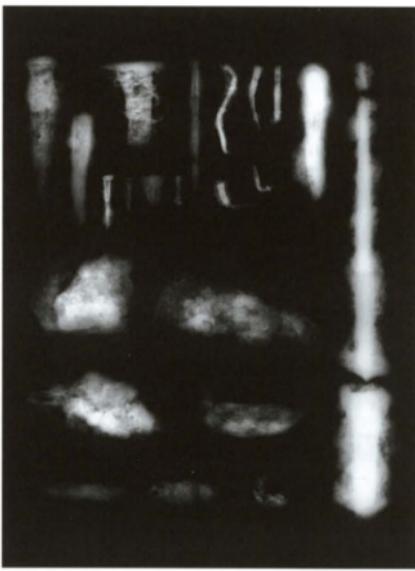


fig.81 同上X線透過画像

第5節 兵庫津遺跡第52次調査出土の動物遺存体

丸山 真史（奈良文化財研究所 客員研究員）

1) 概 要

兵庫津遺跡は古代から近世にかけての複合遺跡であり、これまでの調査では中世から近世までの動物遺存体が出土している。今回報告する動物遺存体は、近世から近代にかけての遺構または遺物包含層から出土したものである。当調査地は砂地で、水分が豊富な土壤環境であることから、動物遺存体が保存状態に恵まれたと考えられる。123点にのぼる資料を採集しており、そのうち種類や部位などを同定したものは貝類101点、魚類10点、計111点を数える（表4）。このほか哺乳類が5点出土しているが、種類、部位などの特定は困難である。

2) 種類別の特徴

貝類（表5） サザエが最も多く出土しており、SE202から37点、第3遺構面から2点（殻体1、蓋1）、計39点を数える。棘の発達していない個体ばかりで、殻長が最小53.3mm、最大94.4mm、平均72.1mmを測る（fig.82）。アカニシがSE202から16点出土しており、殻長100.0mm以下の小型から中型個体が大部分を占める（fig.83）。ハマグリがSE202から5点（左1、右2、不明2）、SD202から2点（左右不明）、投棄土坑から1点（右）、B建物から3点（左2、右1）、計11点が出土しており、計測できたものは殻長37.7mmである。テングニシがSE202から10点出土しており、最小で殻長96.0mm、最大で113.9mm以上を測る。バイがSE202から6点出土しており、最小で殻長53.0mm、最大で63.7mm、平均59.9mmを測る。フネガイ科がSE202から6点、第3遺構面から1点、計7点が出土しており、本科のなかでもアカガイ、サルボウガイ、サトウガイなどと考えられる。シジミ類がSD202から2点（右1、不明1）、SX204から2点（左1、右1）、投棄土坑から2点（左）、計6点が出土している。ミミガイ科（アワビ類）がSE202から3点、SX204から1点、第2遺構面上から1点、計5点が出土している。アカガイがSE202から2点（左1、右1）出土しており、計測できたものは殻長107.7mmを測る。

表4 種名表

軟体動物門 Mollusca	
腹足綱 Gastropoda	
古腹足目 Volutigastropoda	
ミミガイ科 Miliidae	
ミミガイ科の一種 <i>Haliofidae</i> gen. et sp. indet.	
サザエ科 Turbinidae	
サザエ <i>Turbo cornutus</i>	
新腹足目 Neogastropoda	
アッキガイ科 Muricidae	
アカニシ <i>Rapana venosa</i>	
エゾバイ科 Buccinidae	
バイ <i>Bulbonia japonica</i>	
テングニシ科 Melongenidae	
テングニシ <i>Habenaria tuba</i>	
斧足綱 Bivalvia	
フネガイ目 Arcoida	
フネガイ科 Arcidae	
アカガイ <i>Spharanka broughi</i>	
フネガイ科の一種 <i>Arcidae</i> gen. et sp. indet.	
カキ目 Ostreoidae	
イタボガキ科 Ostreidae	
イタボガキ科の一種 <i>Ostreidae</i> gen. et sp. indet.	
脊椎動物門 Vertebrata	
硬骨魚綱 Osteichthyes	
スズキ目 Percidae	
スズキ科 Percichthyidae	
スズキ <i>Lateslabu japonicus</i>	
ハタ科 Serranidae	
ハタ科の一種 <i>Serranidae</i> gen. et sp. indet.	
アジ科 Carangidae	
ブリ属の一種 <i>Seriola</i> sp.	
タイ科 Sparidae	
マダイ <i>Pagrus major</i>	
ブフ目 Teleosteiiformes	
カワハギ科 Monacanthidae	
カワハギ科の一種 <i>Monacanthidae</i> gen. et sp. indet.	

魚類（表6） SX101からマダイの前頭骨が1点出土しており、正中方向に切断した「兜割り」されている可能性がある。明治時代以降の投棄土坑からブリ属が3点、スズキとハタ科が2点ずつ、マダイとカワハギ科が1点ずつ出土している。魚類の大きさはブリ属が体長80cm以上、スズキが40~50cm、ハタ科が50~70cm、マダイが30~40cm、カワハギ科が20~30cmである。

哺乳類 遺物包含層（褐色粘質砂層、18C後～19C前）からウシやウマに相当する大きさの四肢骨片が2点出土している。遺物包含層（暗灰色細砂、18C後）からイノシシやニホンジカに相当する大きさの四肢骨片が2点出土している。遺物包含層（淡灰色～褐色砂、18C後）からイノシシやニホンジカに相当する大きさの四肢骨片が1点出土している。

3) 兵庫津遺跡にみる貝類利用

当調査地は、元禄期の『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』の柳原惣門の「札場」、「戎社」に位置し、惣門は19世紀後半までこの地にあったことが知られる。貝類が最も多く出土した井戸SE202（18世紀後半～19世紀前半）では、海水産貝類85点が出土しており、サザエ、アカニシ、テングニシなどの巻貝が多く、ハマグリなどの二枚貝は少ない。その他の遺構では貝類の出土はごく少数に留まり、それらの大部分は鹹水産で、淡水ないし汽水産のシジミ類が少数含まれる。

SE202から出土した貝類は食用となる種類ばかりで、サザエやアワビ類は淡路島など岩礁が発達する地域から持ち込まれた可能性があり、その他の種類は兵庫津近郊で捕獲することができる。サザエには殻口や殻体が破損しているものが含まれ、アカニシの大部分は殻口、殻体が破損している。これらの殻が人為的に打ち割られたことが示唆され、生食するなどのために肉を取り出したことが窺える。

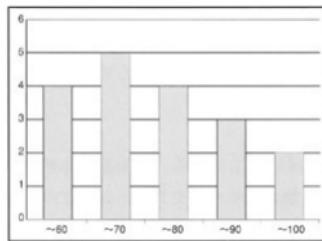


fig.82 サザエ殻長分布 (mm)

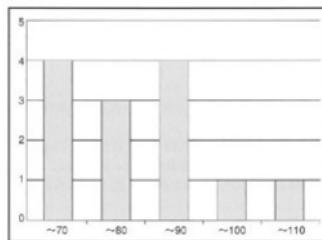


fig.83 アカニシ殻長分布 (mm)

表5 貝類集計表

時期	層位/遺構	種類	左	右	-	計	個数
18c中～後	SD301北縁候出中	アカニシ?			1	1	1
18c後	第3遺構面検出中	サザエ			1(1)	2	2
18c後～19c前	SE202	アワビ類			3	3	3
		サザエ			37	37	37
		アカニシ			16	16	16
		テングニシ			10	10	10
		バイ			6	6	6
		アカガイ	1	1			2
		フネガイ科	2		4	6	2
		ハマグリ	1	2	2	5	2
		シジミ類			1	1	1
		ハマグリ			2	2	2
明治以降	SD202上層南北	アワビ類			1	1	1
	SX204	シジミ類	1	1			2
		アワビ類			1	1	1
		第2遺構面上			1	1	1
	埋棄土坑内	フネガイ科			1	1	1
明治以降	投棄土坑内	シジミ類	2			2	2
	B建物下層	ハマグリ	1			1	1
		ハマグリ	2	1		3	2
計							102 91

()内は累の数量

表6 魚類集計表

時期	漁 構	小 分 類	部 位	左	右	-	計
明治以降	投棄土坑内	マダイ	前頭骨			1	1
		スズキ	椎骨			2	2
		ハタ科	前頭蓋骨	1		1	
		ブリ属	椎骨			3	3
		マダイ	頭骨	1			1
		カワハギ科	椎骨			1	1
計							10

兵庫津遺跡の各地点で出土する貝類は海水産が大部分を占めており、第2次調査では17世紀後半から19世紀前半にかけての遺構あるいは遺物包含層から、巻貝のバイと二枚貝のハマグリを中心とする貝類が出土している（大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター2006）。第14次調査では二枚貝のトリガイやハマグリなどを主体としており（丸山・松井2010）、第42次調査では巻貝のアカニシ、第44次調査では二枚貝のアカガイ、ハマグリ、イタボガキ科が少量ずつ出土している（丸山・松井2008）。兵庫津遺跡では、地点別に貝類組成に相違が見られ、当地点は巻貝を主体としていることが特徴的である。17世紀後半以降の京都・大坂では、ハマグリやシジミ類などの二枚貝が主体になる遺構が一般的である。しかし、17世紀前半の京都の武家屋敷跡ではサザエを中心とする巻貝の出土頻度が高く、出土量も多い（丸山2010など）。また、大坂城三の丸跡（OSO6-7次）の17世紀初頭の土坑ではサザエが卓越する（池田2007）。

京都・大坂では17世紀前半の武家屋敷跡で、サザエを中心とした巻貝が多く出土する遺構が見られるが、今回の兵庫津遺跡の調査地は武家との関連は見られない。井戸SE202が柳原惣門の札場、あるいは戎社と関連する遺構であれば、投棄された貝類はこの地で行われた宴会や神饌などの残滓である可能性も考えられよう。今のところ、この井戸と札場や戎社との関連の詳細は明らかでないため、食料残滓であるという可能性を指摘するに留めておく。

4)まとめ

当調査では、近世から近・現代にかけての貝類、魚類、哺乳類が出土している。動物遺存体が最も多く出土した18世紀後半～19世紀前半の井戸SE202から出土した貝類は、サザエやアカニシなどの海水産の巻貝を主体としており、兵庫津遺跡の他の地点とは異なる組成を示す。この井戸から出土した貝類は、いずれも食料残滓と考えられ、今後、「攝州八部郡福原庄兵庫津絵図」に記される柳原惣門の札場や戎社との関連が今後明らかになれば、宴会や神饌などの位置づけもできるようになるだろう。

参考文献

- 池田耕2007「貝の分析」「大坂城跡Ⅶ」『大阪市文化財協会pp.47
- 大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター2006『兵庫津遺跡』大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第1号 大手前大学史学研究所
- 丸山真史2010「二條家屋敷跡に見る近世の動物利用」「常盤井戸遺跡発掘調査報告書」同志社大学歴史資料館・同志社女子大学pp.171-189
- 丸山真史・松井章2008「兵庫津遺跡から出土した動物遺存体」「兵庫津遺跡第14次発掘調査報告書」神戸市教育委員会、pp.31-34
- 丸山真史・松井章2010「兵庫津遺跡第14次調査出土の動物遺存体」「兵庫津遺跡発掘調査報告書第14・20・21次調査」第1分冊 神戸市教育委員会 pp.353-386

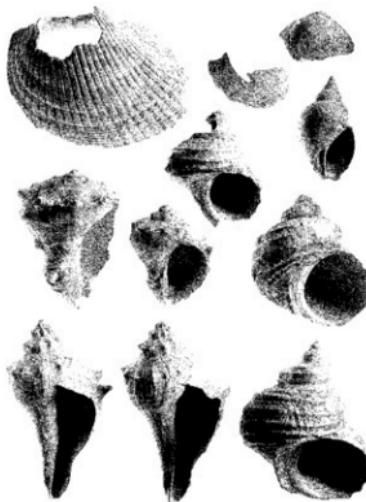


fig.84 貝類遺存体 1アカガイ 2・3ハマグリ 4バイ
5・6アカニシ 7～9サザエ 10・11テングニシ

第3章 まとめ

今回の調査地は「柳原惣門」の所在地と想定される地点にあるが、さらに詳細にいうと、今回の調査区は「元禄絵図」では、「札場」「戎社」の記載がある場所に位置しているものと考えられる。「札場」は高札を掲示する場であり、「戎社」は現在当地に鎮座する「蛭子神社」に連なるものである。

今回の調査では、江戸時代と考えられる時期の3面の遺構面を確認し、種々の遺構を検出した。

第2遺構面で検出したSX204・206・207・208は、全てが同時存在したかどうかは明確ではないが、人頃大以上の石材を多く使用した構築物で、調査区中央から東部に偏って検出されたことから有機的な関連を想定させる。現段階では、「札場」・「戎社」との関連を明確に示すまでは至っていないが、例えばSX206・207について鳥居の礎石及び柱穴の可能性など今後類例の調査などをていざるに検討する必要がある。「札場」跡の調査例は全国的にそれほど多くなく、今回の調査成果と類似する遺構等は現在見出せていない。右垣状遺構SX208について高札場の基壇等の可能性も想定できるが削平のため上部構造が不明であり断定できない。

第3遺構面で検出したSG301については、第2章第3節でもすでにふれたように「元禄絵図」にみられる「札場」南側の湾曲するようなラインとの関係について考慮したが現段階では結論に至らなかった。今後の検討課題である。今回の調査地内に「札場」・「戎社」の境界が存在するかどうかも調査成果からは明らかではない。なお、今回の調査においては都賀堤については全く確認できなかった。

今回の調査では、28ℓ入りコンテナで40箱以上の遺物が出土している。その主体となるのは近世に属するものであるが、中世に属する遺物も含まれる。出土遺物の中には特徴的な遺物がいくつか含まれており、それらを中心に以下考察を行う。

まず丁銀形土製品であるが、西日本を中心として近世遺跡からの出土が確認されている。兵庫県内では、当遺跡（第14・20次）、神戸市萩原遺跡、伊丹市伊丹郷町遺跡、姫路市姫路城跡などで出土しているが用途については不明である。

瓦も多く出土している。大半が近世瓦と考えられるが、中世に遡る時期の瓦も出土している。これらの瓦が直接、柳原惣門や戎社あるいは蛭子神社の屋根に葺かれていたものかどうかの判定は難しいが、通有の軒瓦等のほかに鬼瓦、鳥衾瓦、墀瓦、雁振瓦、留蓋や、各種の道具瓦等多種の瓦が出土しており注目される。

中世の瓦の中には、すでに触れたように錢貨崇寧重宝を押印した軒丸瓦やヘラ状工具により草花?の装飾を施す軒平瓦などもあり、作者の特別な意図が働いていることを感じさせる遺物である。前者については、時期を大きく異なるが錢貨を押印した焼物の類例として、京都府木津川市瀬後谷瓦窯跡出土の和同開珎が押印された須恵器坏があり、賃金を和同開珎で支給された工人が焼成前に押し付けた可能性も考えられている。今回の出土例は瓦であり、また時期も大きく隔てているため直ちに同様の理由を想定することが妥当かどうか考慮する必要があるが、須恵器、瓦ともに本来錢貨を押印する必要性が感じられない焼物であり、上記の想定も一つの考え方として参考となるものである。今後さらに類例の調査を行いたい。

またSD303から出土した一石五輪塔には、空輪から地輪に各々「空」～「地」の文字が漢字で刻まれ、さらに地輪には年月・戒名・日付の銘が入るものがある。梵字ではなく漢字により「空」～「地」の文字が刻まれる類例は伊丹郷町遺跡や堺環濠都市遺跡の和泉砂岩製のものがある。前者は慶長19年〔1614〕の年号が入り、後者では数例出土しているうちの1体に本調査出土例と同様に、地輪に「禪定尼」を含

む銘があり天正11年〔1583〕の年号が入る。今回出土したものも砂岩系の石材を用いており共通点が認められる。漢字による上記の刻みが遅くとも16世紀後半には和泉にあり、西摺においても17世紀前半にはみられることとなった。

今回確認した遺構については、継続して営まれた都市遺跡の宿命ではあるが、後世の改変が著しく性格の不明なものが多い。また遺物についても、中世の中国陶磁のほか、国内各地で生産された陶器・磁器などが多く、多量に出土しており、細部に至るまで考察を行うことはできない。柳原惣門や西国街道、都賀堤、札場、戎社との関連を明確に示す遺構・遺物の断定にも至っていないが、当調査地の発掘調査を実施することにより多くの事柄が得られたこともまた事実である。遺構には直接伴わないものも含めて先にあげた特徴的な遺物は、当地が兵庫津の西の玄関口として中世以来近世にかけて、また現代に續くまで兵庫津のなかで重要な位置を占め続けていることの傍証であろう。今回の調査地周辺は兵庫津遺跡の中でも調査例が少なく不明な点が多い地区であるが、今後の調査例の増加により次第にその様相が明らかになるものと考えられる。

主要参考文献

- 河添功編『兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書』神戸市教育委員会2008
荒木幸治編『発掘された赤穂城下町』赤穂市教育委員会2006
石井清司・森島康雄編『京都府遺跡調査報告書第27号 奈良山瓦当群』財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター1999
稻原附益『馬頭鉢の編年について』「近世の美年代資料」西国近世考古学研究会2000
江戸遺跡研究会編『岡説江戸考古学研究事典』柏書房株式会社2001
大手前大学史学研究所『兵庫津の統合的研究－兵庫津研究の最新成果－』2008
人橋康二、「肥前陶磁」考古学ライブラリー55ニュースイエンス社1993
大橋康二・西田宏子「古伊万里」別冊太陽63平凡社1988
岡田章一編『有岡城跡・伊丹郷町V』兵庫県教育委員会2010
小川章「続鎌倉と近世の考古学」同成社2008
鴫原信二編『内野山南窯跡・内野山北窯跡』猿野町教育委員会1997
九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000
黒田泰正・佐伯一郎・内藤俊哉編『兵庫津遺跡発掘調査報告書 第14・20・21次調査』神戸市教育委員会2010
神戸市立博物館「特別展 よみがえる兵庫津－港湾都市の命脈をたどる－」2004
『言語學記』7「大日本新聞」1971
佐賀県立九州陶磁文化館「北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁」1984
鶴谷利彦「堺掛鉢の生産と流布」『考古学ジャーナル』No.409 1996
白神典之「堺掛鉢考」『東洋陶磁誌VOL.19』東洋陶磁学会
新修神戸市史編集委員会編『新修神戸市史 記史編』近世1992
鈴木重治「出土陶磁器にみる移復技法」「考古学と生活文化」同志社大学考古学シリーズ刊行会1992
『須磨』「当山歴代」1989
田中一廣編『兵庫津38』兵庫津遺跡38次調査会はか2006
上山龍史編『堺環濠都市道路・翁嶋遺跡発掘調査報告』界市教育委員会1990
坪井利弘「因羅瓦屋根」理工学社1977
奈良文化財研究所『本蘭画像データベース』「電子くずし字典データベース連携検索」
林屋辰三郎編『兵庫北岡人船納帳』中央公論美術出版社1981
兵庫県編『兵庫県史 資料編 古代1』1984
兵庫県編『兵庫県史 資料編 古代2』1985
藤井太郎編『兵庫津遺跡第36次発掘調査報告書』2006
藤本史子編『兵庫津遺跡－御崎本町地點発掘調査報告書』大手前大学史学研究所2006
村尾政人・白谷朋徳編『淡河原岡遺跡第1回、第2回、第3回、淡河中原山遺跡第2回発掘調査報告書』同遺跡調査団・株式会社埋文1999
森島康雄編『特別展 平常の北・恭仁京－木津川流域の奈良時代－』京都府立山城郷土資料館2010
森田克行編『播磨高岡城本丸跡発掘調査報告書』高槻市立山城郷土資料館2014
毛利光後彦・佐川正敏・花谷裕『昭和資料帳15 法隆寺の至寶 瓦』株式会社小学館1992
山口県教育委員会『須佐津沖塗』1983
山崎信二『近世瓦の研究』奈良文化財研究所2008
山崎信二『中世瓦の研究』奈良文化財研究所2010
山田勝美監修・「雑字大辭」編集委員会編『異体字解説字典』柏書房1987
山本博利編『姫路城跡I』姫路市教育委員会2001
山本博利編『姫路城跡II』姫路市教育委員会2003

報告書抄録

兵庫津遺跡第52次発掘調査報告書

平成23年3月 印刷
平成23年3月 発行

発 行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-6480

印 刷 デジタルグラフィック株式会社
神戸市中央区弁天町1-1
TEL 078-371-7000

